
【特集】戦後日本の労働者像

特集にあたって

榎 一江

本特集「戦後日本の労働者像」は、科研費プロジェクト「戦後日本における労働者像の生成と文化に関する総合的研究——サラリーマンの社会文化史」（代表：鈴木貴宇，分担：清水剛，榎一江）による共同研究の成果である。我々は、「占領期の民主化政策にてなされた労働改革の時期を起点に、高度経済成長期までの労働者像の変遷を文化史，経済史，経営史の領域から総合的に考察を行う」ことを目指した。その成果の一部は、すでに2023年3月のAAS（Association for Asian Studies）年次大会（於ボストン）で発表され、そこでの議論を踏まえて本特集が組まれた。

鈴木貴宇「『サラリーマン諸君』の群像——1950年代から60年代にかけての『労働者像』に関する考察試論」は、こうした問題意識に基づく研究代表者の論稿である。すでに『〈サラリーマン〉の文化史——あるいは「家族」と「安定」の近現代史』青弓社，2022年を上梓している筆者による最新の考察である。

清水剛「サラリーマン，主婦，そして会社——日本におけるホワイトカラー労働者像の変容」は、戦後のホワイトカラー労働者のイメージといわば表裏一体になっている主婦のイメージがどのようなメカニズムによって形成されたかを検討する。経営史に対し、より経営学との接合を図る「歴史経営学」を提唱する筆者ならではの論稿である。

ジェンキンス加奈「新たな視点の提案——ゴードン W. プランゲ文庫の所蔵資料を通じて」は、AASでの鈴木・清水・榎報告に対して、その所蔵資料を通して新たな議論を提起する。メリーランド大学ゴードン W. プランゲ文庫室長による貴重な所蔵資料の紹介である。

ところで、我々の共同研究は最終年度を迎えた。2024年12月23日には早稲田大学国際会議場第二会議室にて国際シンポジウムが実施され、アンドルー・ゴードン（ハーバード大学）による基調講演に加え、坪井秀人（早稲田大学）、清水剛（東京大学）、榎一江（法政大学）が報告した。また、2025年には東京大学駒場博物館、早稲田大学ワセダギャラリーにおいて法政大学大原社会問題研究所の所蔵資料を中心とした展示会の開催も予定している。本特集は、この国際シンポジウムや展示会に合わせて、日米両国に残された貴重な資料とともに「戦後日本の労働者像」に迫る。狭義には異なるディシプリンとして交わることのなかった者たちの共同研究が、相乗効果を発揮していたら幸いである。

（えのき・かずえ 法政大学大原社会問題研究所教授）

付記：本研究はJSPS科研費JP22K01842の助成を受けたものである。